



始まり、つまり1年のスタートという認識がありました。「夏も近づく八十八夜～」の歌は有名ですが、これは立春を起算日として数えたもので5月の連休中になります。お茶摘みに最適といわれるこの時期は、農家が種籾たねもみを播いて発芽させ、田植えができる大きさまで育てる苗代なわしろ・苗床作りに入る時期でもあります。二百十日は9月1日で台風シーズンに備えて警戒を強くし、稲刈りのタイミングをはかる大切な日になっています。

立春は1年の始まりで、新しいことを始めるチャンスだったり、今までやってこなかったことに挑戦したりする時でもあり、持ち物を新調し、使い始めるのにもお勧めの時期といわれます。リニューアルした『季刊RENGO』は、春夏秋冬の年4回の発行となり、この春

『季刊RENGO』スタート

1年の始まりは「立春」から!?

江戸時代まで、日本では1年の始まりは「立春」からでした。これは月の満ち欠けと太陽の日差しの長さを合わせて作られた中国の「太陰太陽暦」が使われてきたことによります。欧米の「太陽暦」が採用されたのは1872(明治5)年で、「太陰太陽暦」は「旧暦」となり、現在の1月22日から2月19日の間にある正月の始まりとされる日は「旧正月」と呼ばれるようになりました。中国の「春節」が有名ですが、韓国やベトナムなどでも旧正月を祝日に定めています。太陽暦は「新暦」となり、現在の1月1日が1年の始まりとされましたが、年賀状の「新春」「迎春」の言葉に旧暦の名残があります。

立春の前日は「節分」で、最近は「恵方巻き」を食べることが流行っていますが、季節の変わり目には邪気が生じるとされ、その邪気を鬼に見立てて追い払う儀式が「豆まき」です。年の数だけ豆を食べて1年の無病息災を願う風習もありますが、現代でも季節の変わり目は体調を崩す人が多く、立春の頃はインフルエンザなどが猛威を振るい、花粉症に悩まされる季節が到来します。

お米が主食であった日本では古来より立春が米作りの

号からスタートです。歴史と伝統ある運動を継承し、改革と創造に挑戦していく、そんな連合の歩みを『季刊RENGO』で発信していきます。新たに展開するオンライン記事「RENGO ONLINE」とあわせて、引き続きご愛読をお願いします。

防災・減災、自然災害などへの備えを万全に!

2023年は10万人以上の犠牲者が出た関東大震災から100年となります。2月6日に発生したトルコ・シリア大地震では5万人を超える犠牲者との報道がありました。連合は1995年の阪神・淡路大震災の教訓から、被災地の救援や復興のためのボランティアの体制づくりに地方連合会とともに取り組み、2004年の新潟県中越地震での活動を経験しました。そして2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震では復旧・復興のボランティア活動の基盤として大きく貢献し、構成産別の組織力と地方連合会の地域活動の連携の強さを示しました。

日本は地震国であり、火山活動も含めて近年の自然災害の被害拡大などへの警鐘が鳴らされています。教訓を風化させることなく、常に防災・減災など災害への備えを怠ることなく臨んでいくことが必要です。